

(読書ノート) ポラニー『大転換』をどう読み取るか？

Fred Block の Introduction to The Great Transformation 2001 new edition 抜粋

ポラニーが提起した根本的問題

「ヨーロッパで 1815 年から 1914 年まで続いた比較的平和で繁栄した時代が、なぜ突然経済的崩壊、ファシズム、さらに二つの世界戦争で終焉したのか」

ポラニーが提出し、証明しようとした回答

「世界経済を自己調整的な市場経済というユートピア的プランによって組織しようとした市場自由主義（マルサス、リカードに発する）の直接の結果である」

ポラニーの歴史認識

「ポラニーは市場自由主義のユートピア批判においてケインズと類似しているが、マクロ経済政策による市場経済救済を信じない点でケインズ主義者ではない。かれは生涯を通じて社会主義者をもって任じたが、経済決定主義者ではなく、正統派マルクス主義者ではなかった」 6

論理の出発点

「かれの論理を理解する手がかりは、埋め込み概念についての彼の認識である・・・〈埋め込み〉は、経済が経済学のような自動的プロセスではなく、政治、宗教、社会関係に従属しているという理解である。ポラニーがこの概念を用いた理由は、リカード以来の経済学——経済を社会に従属させるのではなく、自己調整的市場が自己の論理に社会に従属させる必要があるという思想——が、それ以前の経済思想とどれほど根本的に異なっているかを示すためであった。」 7

労働、土地、貨幣の〈擬制〉商品化問題

「埋め込み理論に立脚する二重の運動論は、労働、土地、貨幣の〈擬制〉商品化の論理に基づいている。・・・ポラニーによれば、これらはいずれも交換目的で人間によって生産されたもの（＝商品）ではない。労働は人間の活動であり、土地は自然の一部であり、貨幣・信用の供給は政府の政策なしには実現しない。それにも関わらず、現代経済はこれらが実の商品と同じであるかのような虚偽の過程のうえで運営されている」 9

自己調整的市場の虚偽性とジレンマ

「人間や自然を商品として市場メカニズムの上で取り扱うことの道徳的問題・・・さらに、経済における国家の役割についての誤った理解。労働、土地、貨幣の商品化のために、国家は継続的に重要な役割を演じ続けなければならない。こうして、国家は、自己調節的な

市場経済の内部者として引き入れられる。」 9-10

#### 経済の自立化 (disembedding) の不可能性

「現実の経済は、擬制商品の供給を始めとして、市場の管理に継続的に積極的な役割を果たさなければならない。これは政治的意思決定を必要とし、単なる技術的・行政的機能に還元できない。国家が経済（市場？）の自立化を進めれば、通常の人々は甚大なコストの負担を強いられる。その結果、国家はこれらの人々がその負担に耐えうるようにするための方策を実施しなければならなくなる」 11

#### 市場自由主義者の言い逃れ

「市場の自立化が極度に進行すると、社会は崩壊の危機に、自然は荒廃の危機にさらされる。これらの病理現象が明らかになると、国家は社会を救済する政策を実施せざるをえなくなる。このことが、市場自由主義者に言い逃れの余地を与える。いわく、政府が市場の自立化をさまたげ、不徹底にするからさまざまな社会問題がはっせいするのだ、と」 11

#### ポラニーの〈二重の運動〉論 double movement

「経済の自立化を進める市場自由主義の運動は、必然的に社会からの抵抗を将来する。その結果、市場経済は必然的に二つの反対の運動（自由放任と保護主義的運動）に巻き込まれる。労働者の抵抗は保護主義的運動の最重要な構成要素であるが、自由放任が極度に進行すると、金融的不安定、農産物価格の激変、貿易構造の急変などによって、農民だけではなく、銀行業界や産業界も耐えられなくなる。その結果、関税による保護貿易、植民地の囲い込み、その他の保護主義政策が容認されるようになる」 12

#### ポラニーの〈楽観的な〉社会主義観

「ポラニーは大恐慌や世界戦争が繰り返されるのを防止する方策として、社会主義を展望していたが、かれの社会主義観はマルクス主義のそれとはことなっていた。それは、「民主主義社会にそれを従属させることによって自己調整的市場を乗り越えようとする、近代産業文明に内在的な傾向」として定義される。その場合、市場を社会に埋め込むやり方は一様ではなく、それぞれの社会の歴史的条件によって多様でありうる。いずれにせよ、効率的であると同時に民主的な解決策は見出さる」

〈ポラニーが想定していた参考例は、ローズベルトのニューディール、北欧型福祉国家の経験であったと思われる〉

#### 国際経済の制約

「個々の国は、勝手なやり方で〈二重の運動〉問題を解決しうるわけではない。金本位制度は驚くべき巧妙なアイデアであると同時に、おそるべき失敗が約束された制度

でもあった。現代国際世界は、ふたたび金本位制に復歸することはできないし、復歸してはいけない。金本位制が諸国の国民に課す負担は耐えがたいものである。同時に、政界経済は、最後の貸し手機能を含む、規制と管理のための強力な制度を必要とする。」 19

現代世界におけるアメリカの新自由主義イデオロギーに基づく市場開放政策とそれが  
アフリカ、ラテンアメリカその他の地域で引き起こしている抵抗運動その他の状況が、  
ポラニーの再評価の背景にある。

#### 参考文献

Beverly J. Silver & Giovanni Arrighi, Polanyi's Double Movement: The Belle Epoque of British and U.S. Hegemony Compared. (contributed to *Politics and Society*, 2002)